

3月14日 参議院会館で志位委員長

大使館関係者、学識、紙、内外メディア32社など、多くの方が見解発表がおこなわれた参院会館に参加されたとのこと。32の内外メディアの取材とともに、インターネットを通じて会見の様子が2時間にわたって中継されました。◎私は、「しぶん赤旗」3/15付、シク付などで読み、歴史的な見解となると思いました。

「慰安婦」についての 河野談話

日本軍「慰安婦」についての河野洋平内閣官房長官談話（1993年8月4日）の全文は次の通り。

いわゆる従軍慰安婦問題については、政府は、昨年12月より、調査を進めて来たが、今般その結果がまとまったので発表することとした。今次調査の結果、長期にかつ広範な地域にわたって慰安所が設置され、数多くの慰安婦が存在したことが認められた。慰安所は、当時の軍当局の要請により設置されたものであり、慰安婦の移送、管理及び慰安婦の移送については、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した。慰安婦の募集については、軍の要請を受けた業者が主としてこれに

当たったが、その場合も、甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに加担したこともあったことが明らかになった。また、慰安所における生活は、強制的な状況の下での痛ましいものであった。なお、戦地に移送された慰安婦の出身地については、日本を別とすれば、朝鮮半島が大きな比重を占めていたが、当時の朝鮮半島は我が国の統治下にあり、その募集、移送、管理等も、甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた。いずれにしても、本件は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題である。政府は、この機会に、改めて、その出身地のいかに問わず、いわゆる従軍慰安婦として数多（あまた）の苦痛を経験さ

れ、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し心からお詫（わ）びと反省の気持ちを示し上げる。また、そのような気持ちを我が国としてどのように表すかという点については、有識者のご意見なども徴しつつ、今後とも真剣に検討すべきものと考えられる。われわれはこのような歴史の真実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視していきたい。われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。なお、本問題については、本邦において訴訟が提起されており、また、国際的にも関心が寄せられており、政府としても、今後とも、民間の研究を含め、十分に関心を払って参りたい。

証言の中に実態ある

「河野談話」というものが否定されるものではないというのを、総括的・理論的にまとめてあり、頭が整理されました。日本軍「慰安婦」という性暴力の被害者の視点を抜きに「慰安婦」問題を



「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター共同代表 西野 瑠美子さん

※この紙面は、「しぶん赤旗」3/15付日刊より一部掲載させていただきます。
※全文は「しぶん赤旗」やHPでどうぞ。

「見解」発表を取材した海外メディアの記者からも、さまざまなお感想が出されました。韓国・ソウル新聞の金民希さんは、「河野談話」の見直しの議論は、本当に残念です。いまの日本は、責任をとらない国だと世界から思われても仕方がないと思います」と語ります。「慰

歴史の偽造は許されない

「河野談話」と日本軍「慰安婦」問題の真実

◎志位和夫委員長は14日、国会内で、上記内容の見解を発表しました。

◎一部勢力や政党が「河野談話」の見直しを迫り、政府がこれに迎合的な対応をするも、不当な攻撃への反論としてこの問題の真実を明らかにしたものです。

◎全文は、3月15日付日刊またはHPで。



「河野談話」と日本軍「慰安婦」問題の見解を発表し、会場からの質問を受ける志位和夫委員長。14日、参議院議員会館

「日本の良心守った」 海外メディアから反響

安婦問題、女性の人権そのもの問題だと強調し、「今回の共産党の『見解』は、談話の見直しに反対し、女性の人権をしっかりと位置づけて考えている人たちがいるということを示しています。こうした動きは、日本の良心を守っていると感じました」

フランスRTL放送のジョエル・ルジャンドルさんは「なぜ安倍首相は歴史を修正しようとするのか」と疑問を呈します。「日本は、美しい憲法を持ち、安倍首相が言うことは違ふ、『美しい国』だと思えます。それをなぜ変えようとするのか。今日の志位和夫委員長の『見解』は、歴史修正主義が司法・法的にもなりたないことを証明したと思えます」と語りました。

香港の大公報・駐日本首席代表、首席記者の黄匯傑さんは、日本共産党が「底辺の人たちの声を代表する正義の党であり、大多数の日本国民の真心の声を代表する党だ」ということが分かった」といいます。「今回のように『見解』を発表する努力を積み重ねることば、より多くの人々が歴史問題に真正面から向き合い、正しい認識を持つ上で大きな影響を与えることだと思います」